



第6回国労上野駅分会大会開催

会社はもう少し現場の声を聞くべきではないか

7月8日、地本会議室において第6回上野駅分会大会が開催された。7月1日から営業統括センターが設立されたが、会社が言う「働き方改革」で多くの職場で要員が削減され、仲間からは「仕事にゆとりがない」「サービスの低下だ」「次世代への継承は大丈夫か」など、不安の声があがっている。会社は現場で働いている社員の声を、もう少し紳士的に聞くべきではないのか。実際に働く人が不安を感じ、トップダウン方式の改革で「働きがい」を感じられなくなっている実態をどう考えているのか。今号では、現場で働く仲間の切実な声を紹介したい。

日暮里駅

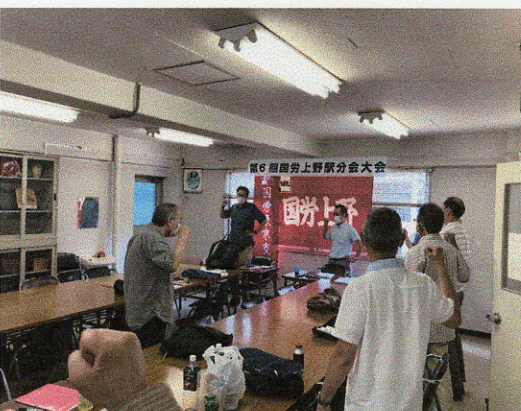
→京成線乗り換え口から間違えてくる旅客が多く、「乗るんですか、出るんですか」といちいち聞かなければいけない。

→遠隔が導入された。インターホン越しでは、こちらの話が旅客に通じず苦勞する。外国人なんかが来ると困ってしまう。

西日暮里駅

→3月に作業ダイヤが変わり、1日の出面が4徹から3徹に減らされた。地下改札は時間によってインターホン対応となり、何かあったら地上改札から行かなければならない。旅客を待たせることもあり、サービスの低下である。

→エスカレーターの起動を以前は2名体制でやっていたが、現在は1名でやらなければいけない。上りと下りの設定を間違えるなどのミスも発生している。2人で確認すればこのようなことも防げらると思う。



上野駅

→ほとんどの個所が委託となり、JR本体は中央改札と出札だけとなった。作業にゆとりがなくなってきた。乗車券袋や時刻表も配布せず、サービスの低下を感じる。

OBからひと言

→JR本体社員の質が下がっている。仕事を教える人があまりわかっていないから、年々質が下がり悪循環となっている。山手線のワンマン運転、ホームドアの設置により、さらなる要員削減の危険性がある。本当にこれで安全が守れるのだろうか。国労も横の連携を密にし、対策を考えた方がよい。